

郷土館だより

Vol. V No.1

1982. 8. 1



ハチ公 (三四呂人形 野口三四郎作)

目次

57年度事業計画について.....	1・2
三島の生んだ偉人・山本玄峰老師.....	3・4・5
資料紹介.....	6
郷土館職員紹介・おしらせ.....	7

57年度事業計画について

—玄峰老師展、青少年健全育成—

昨年度は、郷土館開館10周年を記念し、講演会・テーマ展「明治の三島」、「三島の昔話」の発行等、各種の記念事業を催し、市民の皆さんと共に、祝福することができました。

さて、次期15周年、20周年を目指し、本年度はその出発点として、次のような事業を計画しました。

本年度も早4ヵ月が経過し、今さら事業計画の説明と言っても、ちょっと時期が遅れた感はまだありませんが、これから秋に向け、テーマ展の開催や、体験講座等の計画を組んでおります。

乞ご期待をお願いします。

記

〔事業計画表〕

区 分	事 業 名	期日、場所、概要
展 示	(1)常設展示	2階民俗、3階歴史
	(2)テーマ展 「山本玄峰老師」	10月1日～11月30日 1階テーマ展会場
体験講座	(1)草木染め	10月中旬の日曜日、 会議室外
	(2)おかざり作り	12月中旬、会議室
	(3)年中行事	七草粥
史跡めぐり	近郊史跡めぐり	11月
映画教室	(1)春の映画教室	4月1～6日、会議室
	(2)夏の映画教室	7月25日、8月1日、 8月4～8日
シリーズ講座	「山本玄峰老師について」	10～11月の土、日曜日 (3回シリーズ) 会議室
調査、研究	(1)古老に聞く会	6月、3月、 各部落集会所
	(2)古文書読習会	第2、4土曜日、 会議室
少年教室	(1)夏休み郷土学習会	8月1、2、3日、箱根
	(2)初午織り作り	1月30日(土)、会議室
	(3)伝承玩具作り	10月
青少年地域活動	(1)縄文土器作り	11月中旬～12月中旬、 日曜日 会議室及び館前広場
	(2)史跡探訪	9～11月
	(3)おかざり作り	11月
刊行物	(1)「三島の昔話」増刷	7月中旬、1,000部
	(2)郷土館だより	4、8、12月

〔各事業の説明〕

1. 展示事業

(1)常設展示

開館時より基本的な展示替は行っていません。ただ、一部コーナーや、何点かの展

示資料は、随時入れ替を行っております。

博物館関係の書物に「常設展示は、常時館にみえる人にとって、少しも変わっていない印象を与え、たまに来る人には、来るたびに変わっていると感じさせる展示方法が望ましい」と書いてありました。

幸い、当館は展示スペースの割合が広く、(逆に、収蔵スペースが狭い)、質、分類的にはどうかと思うが、収蔵点数が多いため、未展示資料を今後、なるべく多くの方に、ご覧できるように努力したいと思えます。

(2)テーマ展

龍沢寺の前老師でありました山本玄峰さんのテーマ展を開催します。

老師は、龍沢寺歴代老師の白隠や東嶺程、知名度は高くないが、その人間性や人格人物の大きさに対し、地元壇家の人々はもとより、中央政財界において、多くの心酔者がありました。

終戦の際「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び……」と天皇が述べた冒頭の文章発想や、憲法に「天皇は日本国の象徴である」と示唆したのも玄峰老師です。

玄峰老師についての詳細は、後段で紹介があります。

2. 体験講座

最近の傾向は、観たり、聞いたりする事よりも、自ら参加し、自身の手で何かを作ったり、アタックする事が好まれています。

博物館運営においても、平面的、静的な展示より、触れたり、ボタンを押すと展示物が動いたり、声が出る様なものが喜ばれます。

このような中で、体験講座のような、何かを製作したり、それで遊んだりする講座が、どの博物館でも好評のようです。

(1)草木染め講座

化学染料万能で、色彩豊かで色鮮やかな服装、色落ちのない染色が、常識となっておりますが、草木染による色あいは、深みや、温味や、やさしさが何んとも言えないものがあります。

この染色を通し、当時の生活の知恵や衣生活を偲んでみたいと思います。

(2)おかざり作り講座

年中行事の簡素化や、同様企画が他施設

で実施されているため、当初開催した頃より、この講座の魅力度が少々薄れた感があります。

3. 史跡めぐり

NHK大河ドラマ「草燃える」で、頼朝、政子のゆかりの地である当市や中伊豆地区は観光スポットを浴び、歴史ブームとなりました。

館では、これらの要望に答え、又郷土史に対する興味をより深めていただくため、各種の史跡めぐりを催しました。

市内、近郊はもとより、鎌倉、山梨県等にも足を伸ばし、その事業効果を大いに高めてきました。

だが、市有バスを使用して、このような行事を行う事は、運営管理上問題があるという事で、一時見合わせていましたが、この問題について許可ができましたので、本年度は、秋季に、バスを利用して実施いたします。

4. 映画教室

夏休みに入ると、たくさんの児童生徒が、入館されます。

映画を通し、昔のくらしや、郷土の事を、楽しく学んでいただく目的で毎年催しています。

5. シリーズ講座—“山本玄峰老師”

郷土の傑出した人物としての紹介と、テーマ展の主旨をより理解していただくために、シリーズ講座を計画しました。

講師には、龍沢寺の僧侶さんや、老師と親交のあった方を予定しております。

6. 調査研究

(1) 古老に聞く会

各部落の古老の方より、若い頃の衣食住の様子や風俗、風習について、語っていただきます。

社会情勢や生活様式が、めまぐるしく変化し、現在の我々には考えられない事や、既に忘れ去られようとしている行事等が、たくさん話題にのぼります。

(2) 古文書読習会

定例読習会は、20余名の会員が、月2回当館収蔵資料等を教材にして、古文書読習を行っています。

また、昨年度より樋口本陣の文書調査を開始し、目録作成に向けて、ご尽力、ご協

力いただいています。

7. 少年教室

県の補助事業として、昭和54年度より発足し、当館は発足時より連続して、この事業を実施しています。

事業目的は“少年の文化活動を振興し、郷土に対する関心と理解を深め、地域の形成者として、資質の高揚を図る”ことです。

夏休み郷土学習「親子で学ぶ夏の植物教室」や、「初午織り作り」を計画しています。

8. 青少年地域活動事業（青少年健全育成）

当市は、「豊かな心を育てる施策推進モデル都市」として、文部省から指定（全国28市町）されました。

この推進事業として、当館の青少年地域活動が参画します。

(1) 縄文土器作り

二千年以上も昔、縄文人と呼ばれる古代人が、生活の道具として使用した土器を、皆で作ってみようという体験学習です。

用土作りより、焼成まで、自分の手で縄文土器を作り、古代人の知恵や生活を探ってみようと思います。

(2) 史跡探訪

郷土の歴史や文化財に関心、理解が薄いため、現地見学と参考資料による説明を行い、これら貴重な史跡が身近な存在となるよう勉強していただきたい。

そして地域社会への関心を深め、豊かな人間性を培かうように、一諸に努力したいと思います。

9. 刊行物

(1) 「三島の昔話」の増刷

市制40周年、郷土館10周年を記念して発行しました「三島の昔話」は、発行間もなく売り切れてしまいましたが、その後、購入希望の方より、問い合わせが数多くありました。

7月中旬に、増刷しましたので、お求めでない方は、お申し込み下さい。

(2) 郷土館だより

郷土館をより理解していただくよう、内容充実につとめたいと思います。

ご指導、ご援助をよろしく、お願いします。

(館長 梅田貞治)

三島の生んだ偉人

山本玄峰老師

竜沢寺の山本玄峰老師と聞いて「あの方だ」とすぐ判る人は三島でも少なくなってきたようである。井上日召氏の特別弁護人になられたり、終戦にあたり鈴木貫太郎首相に助言を与えられ、天皇制存続への示唆など政界・財界人からも慕われていた方だが、亡くなってすでに21年になる。

三島市郷土館では、この郷土の生んだ偉人を偲んで、今秋、山本玄峰遺墨展を開催する。準備段階ながら、市民と老師の交流及び、知る人が少ない終戦と玄峰老師との関わりを紹介したい。

臨濟宗では、白隠の再来と言われ、その悟りの深さや眼力を、我々凡人には知るよすがもないが、老師の遺墨・遺品から、一度会うと生涯忘れられない人と言われる、その人徳を偲ぶことができらばと思う。

1. 生涯

誕生から入寂までエピソードにこと欠かない人である。すんなり仏教界に入られた訳でなく、もし不治の眼病にかからなければ、紀州の山持ちとして平隠な一生を終わるはずの人であった。老師については、高木蒼梧著「玄峰老師」及び玉置辨吉編著「回想一山本玄峰」に詳しい。

19歳で、失明寸前の眼病を煩い、病氣平癒を祈願しての四国八十八ヶ所霊場はだし参りの7回目、土佐雪溪寺の太玄和尚に見込まれ得度したのが24歳、以後昭和36年96歳で入寂されるまで仏門一筋生涯座禅の生活であった。

この間、無学文盲、おまけに失明寸前から出発、文字通り血のにじむ修業を積む中で、雪溪寺を始め、各地の荒寺の再興を果たす。

大正4年、50歳で、三島市沢地の竜沢寺の住職に請われ入寺する。白隠禪師が起こされた由緒ある寺であるが、荒れほうだいに荒れ、蒲団もなければお椀一つ、茶碗一つなかったという。屋根は穴だらけ、雨天には傘をさして経を読む状態であった。

古參の雲水宗舜・宗鶴師たちと大正年間、寺の再建につくされる。禪堂・庫裡の改修等を行ない寺の体裁が整っていった。

その頃から老師をしたって、全国から雲水が集まるようになる。弟子の中には、竜沢寺の住職を継がれた中川宗淵老師・鈴木宗忠師を始め、東京谷中全生庵住職平井玄恭師、松陰寺・円福寺住職の通山宗鶴師など、現在仏教界の重鎮をなしている方が多い。

修業は厳しいものだったらしく、雲水は老師を大いに恐れたという。語録を拾うと、

「雪崩に遭うて、死ぬような危亡を思うてみい。

坐禅は苦しいうちに入りはせん。」

「禅宗の修業は天地とわれと同根、万物とわれと同一体となるための修業じゃ。そして人間はこういうものじゃから、人間の本能を尽すにはこうしなければならんという、ほんとうの道理に明らかになるための修業じゃ。何もほかのことではない。一切の理に明らかになるのじゃ。」

老師の大喝が想像される。

老師のもとに集まるのは、政財界人も多かった。共産党の大黒柱、田中清玄氏、鈴木貫太郎首相、吉田茂首相、池田勇人首相など、老師を師と仰ぎ竜沢寺や東京の全生庵へ通い、私的・公的な悩みを糸をほぐしたという。

又、老師は時の首相も、一市民も、応待に分け隔てする事はなかった。初任の修業が、竹倉温泉に老師を尋ねてきた時、

「茶を出せばええよ。けれどはるばる東京から運転してきた運転手には、できるだけおいしいものを食べさせ、上がって横になるなり、ゆっくり休んでもらってほしい」と配慮された。何にこびることなく、唯感謝の生活を旨とする老師の人柄が表われていると思う。



2. 三島と老師——遺墨より

竜沢寺の裏山を登りきると、富士山を迎ぐことができる。老師はことのほかこの山を愛されたらしく色紙等によく富士山を書かれている。

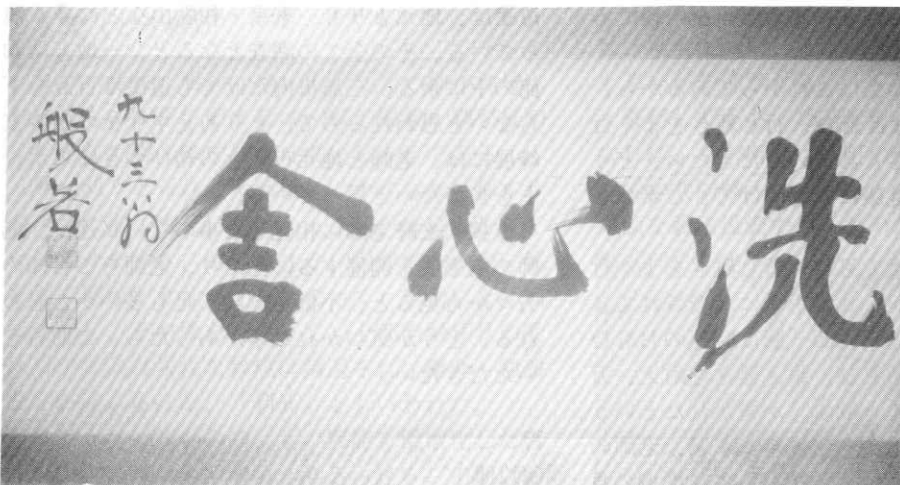
その中で、三島市竹倉温泉伯日荘の枕屏風に残された富士山は圧倒的である。太い筆にたっぷり墨を含ませ一気に書き上げた一本の線で、果てしない空間と宏大な山を出現させ、大パノラマを見る気持ちにさせる。

老師は、ことのほか竹倉温泉を愛され、遠方へ旅立つ前後は必ず泊まって疲れを癒され、晩年病に伏せてからもここに投宿され、ついにここで息を引き取られる。老師自身、この書が大層気に入られ、今まで書いた書の中で最もよいものだとも言われたと言う。

「わしが、亡くなったら、遺墨展 ひとと開かれる時 ば 出品するように。」伯日荘のおかみに申されたそうである。

竜沢寺では、老師の袈裟などを、市内中央町にあるクリーニング店へ出していた。その店主が一筆書いていただきたいとお願いして下さったのが「洗心舎」

「いつもわたらの衣を洗って下さりありがとう。衣ばかりでなく、心まで洗われるように」と言われて書いたそうである。日に焼けて、大分紙も赤茶けたが、やわらかな書風は、見る者の心を和ませる。



市内大宮町に住む蛭海静子さんは、能の大家として活躍され、宝生流の名家命尾家を継がれた。

そしてその披露として女性では初めて「娘道城寺」の舞台を踏む事になった。昭和29年の事である。

600年の能の伝統を破る出来事というので新聞にも取り上げられ評判となった。玄峰老師は、心配されて、能装束の肌着に「南無観世音菩薩」と書かれ、本堂に安置して、日夜、舞台の成功を祈られたそうである。当日、蛭海さんは、この肌着を付けて舞台をつとめられたが、しかけもうまくいき、大成功に終わったそうである。

三島市内を人づてに老師の遺墨を尋ねて歩くとどこの家でも、玄峰老師の事となると、大喜びで迎えて下さる。遺墨も大切に保存されており、没後20年たった今も、老師が人々の心に生きているのを感じた。

「生きていなさる時は、どこにでもいる、ええお坊さんと思うとったけれど、今思うと、あんな偉い人はもう出てこんでしょう。」と何人かの方が話している。老師に対する尊敬の念はますます深まっているようである。

3. 終戦秘話

太平洋戦争に出陣する若者に送った書「武運長久」たたきつけるような鋭い筆法で書かれており、おだやかな書風を見慣れた者には、軽い驚きを感じる。人間同志が殺し合う戦争に対し、老師は心中、憤り・悲しみの念を持たれたのではないだろうか。大正12年、58歳の時、目は不自由・言葉は喋れないで、一人世界一周され、各国の名士と会見されたほどの人だから、世界情勢にも敏感であ

ったであろう。昭和18年、まだ日本軍が快進撃を続けていた中、初めてアメリカ軍の空襲を受けた時、「ああだめだ。日本はもうこれで負けた…」と侍者に話されたそうである。すでにその時から戦争の終結を考えていたようである。

運命の出逢いと
言うべきだろうか。昭和20年4月、現三幸建設社長の四元義隆氏の紹介で、当時枢密院議長をされ

ていた鈴木貫太郎大将と会う。当時、軍部の権力は絶大で、政府の高官ですら、日本は負けると言ったことが判れば、切腹させられる時代に、戦争終結を考えていた四元氏は、同じ考えを持つ鈴木大将を三島に連れて行く。

一日会うなり老師は言われた。

「日本は相撲でいうならば横綱が大関だ。横綱は負けるときは横綱らしく堂々と負けなくちゃいけない。この処理のできるのはあなたをおいてほかにはない。どうぞあなたは日本の国を背負って働いていただきたい。」そして又、
「あなたは非常に正直な軍人で、あなたのような人は政治家には向かないけれども、いまのような非常なときにはあなたのような人でなくちゃこの日本の結末はつけることはできない。それじゃから、あんたはひとつ大いに国のために働いていただきたい。」と激励された。鈴木大将は志をいっそう深くされたそうである。一週間後、鈴木大将に首相の大命が下り、鈴木首相は戦争終結に向かって準備を始める。

鈴木氏首相就任を知るはずもなく、初対面の人物を、これぞ戦争を終わらせる男だと見抜き、禁句の敗戦を説いてはばからない、老師の眼力の鋭さは見事という他はない。

8月8日頃（8月13日という人もいる）8月15日終戦と決まり、秘密裏に、四元氏から玄峰老師のもとへ使者がたてられた。使者は人目をはばかり、箱根山中を一晚で越えたという。老師はその手紙を読まれるなり、鈴木首相あてに手紙を書く。当時老師の侍者をされていた平井玄恭氏は、その手紙を拝見させてもらうと、次のような内容であったという。

「あなたの本当のご奉公はこれからであるから、どうぞ忍び難きをよく忍び、行じ難きをよく行じて、国のために尽くしていただきたい。どうぞご自愛専一に、健康に気をつけて、ご奉公していただきたい。」

この「忍び難きをよく忍び、行じ難きをよく行じ」は禅語でもあるが、この手紙に示唆されて、有名な8月15日天皇陛下の詔「朕は時運のおもむくところ、忍び難きを忍び、耐え難きを耐え、万世のため太平を開かんと欲す。」が書かれたという。

鈴木首相の老師に対する信頼篤く、又、老師の戦争終結への悲願が、鈴木首相をして、横綱の負け戦をとらせたものと思う。

戦後の天皇制存続問題にも老師は関わりを持つ

が、紙面の関係上、「天皇は日本国の象徴」という言葉は、老師が話された事を記すに留める。



戦後、全国的にその偉徳が知れ渡り、禅宗界、政界、財界に強い影響力を持たれたので、老師の遺墨は、地元よりも、東京・和歌山などに多く残っている。その全ての調査となると、一地方博物館の手に余る。三島市内だけでも遺墨は百点を下らないと思われるので、とりあえず今秋の山本玄峰展には、老師と地元市民との結びつきにスポットを当てたいと思っている。

直接、玄峰老師に相見した事のない私達が、老師の遺墨展を開催するに当たり、老師をご存知の方々から見ると、不備・認識不足も多いかと思われる。どうか気づかれた事があったら、ご助言をいただきたい。

（鈴木淑子）

資料紹介（館蔵品）

■展示品見学の手引■

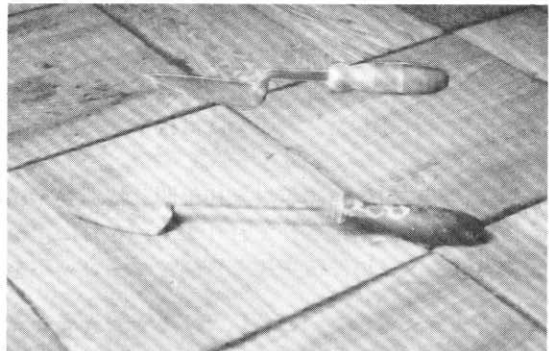
火熨斗（ひのし）

着物などの衣類のしわをのばしたり、折目をつけたりする時に使用した器具である。一般には丸い形をしていて底のなめらかな金属（真鍮等）製の容器に木製の柄がついている。この容器の中に炭火を入れてその熱を利用して主に広いスペースのしわのばしに使用した。これには別に置台を必要としていた。



鍔（こて）

火鉢やいろいろのあつ灰の中で熱して着物や布のしわをのばしたり、細かい部分を折り曲げたりする時に使用したものである。鉄製で底はなめらかで先が細くなっているのが一般的である。柄には木の取手をさしこんである。これは小型のものや大型のもの両方がある。和裁などをする時火鉢やいろいろの熱灰の中に入れておきさえすればいつでも使え便利で簡便な器具であった。火熨斗（ひのし）鍔（こて）は電気アイロンが普及した昭和30年代初めまで一般家庭に使われていたものである。（稲木）



■収集資料紹介■（昭和57年4月～6月）

収 集 日	資 料 名	点 数	提 供 者	住 所
57年5月6日	唐箕、シロナラシ	2	河野 昇氏	市内若松町4350
57年5月24日	季王家別邸絵図、他	2	佐竹 恭一氏	市内旭ヶ丘16-18
57年6月16日	鍵、錠	33	小川 光俊氏	市内中央町
57年6月16日	鉄びん	1	佐藤ふみ子氏	市内中84の7

唐箕（とうみ）

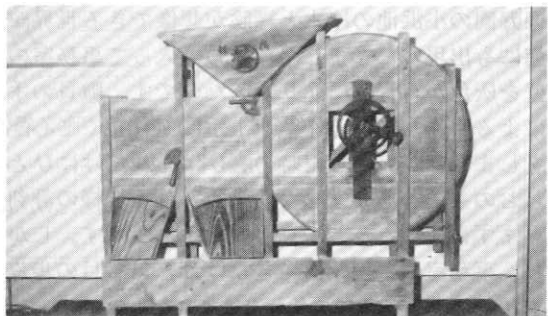
写真の農具「唐箕」は、この地方の稲作地域においても、20年位前までは、稲の脱穀・調整具の一つとして盛んに使用されていたものである。

秋、刈りとられ、千歯扱きかけられ、粃すりの済んだ稲が唐箕にかけられ、粃の中に混じっている塵介を除き、選別される。円形の胴の中に風を起す扇板がとりつけられていて、手動により扇板を回し、その風力によって、上部の漏斗状の受入口から入れられた穀粒は精選され、塵介、粃殻などが除去された。「利箕」ともいわれた。

手動とはいうものの、箕の機能を機械化した唐箕の出現は江戸末期の頃と考えられる。中期以前の文献には、竹・藤の皮で編まれた箕が使われていたとある。唐箕の発明によって、作業の能率は

数倍にも上ったことであろう。当時の農民の驚きと喜びが想像される。

寄贈して下さった若松町の河野昇さんの話によれば、この唐箕は茅町の望月商店から買ったもので、共同購入であったという。農家にとっては高価な設備投資であったのだろう。（杉村）



郷土館職員紹介

4月の定例人事異動により、一部職員の異動がありました。ここで、一新した職員を紹介させていただきます。

梅田貞治館長 昨年10月に新任館長として赴任以来、郷土館をよくすることに熱意を燃やしております。館周囲の木立がさっぱりとしたのに気づかれた方も多はず。館長の隠れたる特技で、植木ばさみの手つきも職人はだです。

稲木久男主査 郷土館へ来てすでに4年半、郷土館の主と言われております。赤いヘルメットでオートバイを疾走する様は、まるで暴走族、とても2人の子持ちとは……。7月末に、ライフワーク「ふるさとの街道、三島道石畳を歩く」が出版されました。書店又は直接本人へお申し込み下さい。

杉村斉(学芸員) 開館以来10年間、特別展・民俗学の分野で活躍されております。6月に、箱根キリシタンの源流を探る目的でヨーロッパを



旅行されました。成果が期待されます。

鈴木淑子(学芸員) 4月の異動で秘書課からまいりました。本人曰く、「私は引っ込み思案で無口で……」本当かな?と周囲の声。意欲だけは十分のようです。どうぞお引き立て下さい。

以上4名、郷土館の新たなる十年を築こうと努力する所存です。どうぞよろしく願います。

※ 北小に転任された宮崎順子さんは、1月にかわいい赤ちゃんが生まれ、今は育児で大忙がしだそうです。

★★★★★★ おしらせ ★★★★★★

■郷土館の行事予定■

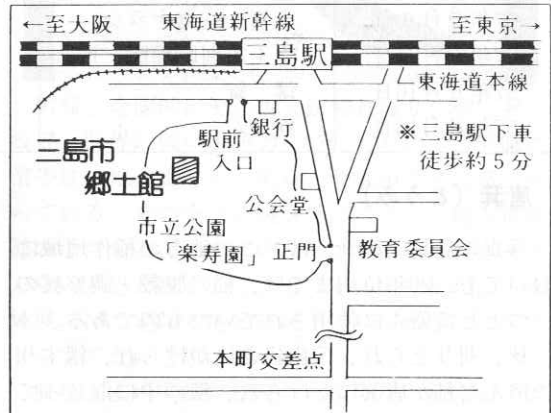
- テーマ展「玄峰老師展」 57年10月～11月
- 近郊史跡めぐり 57年11月
- 体験講座「草木染めと織り」 57年10月
- 体験講座「おかざり作り」 57年12月
- シリーズ講座「山本玄峰」(1) 57年10月
- シリーズ講座「山本玄峰」(2) 57年11月
- 少年教室「親子夏の郷土学習会」 57年8月
- 少年教室「ふるさと探訪」 57年10月
- 少年教室「縄文土器作り」 57年11月～12月
- 夏の映画教室 57年8月

■編集後記■

風鈴の音が涼やかに聞こえる季節になりました。楽寿園の小浜池の冷水と縁陰が想像できる世界が館にも出現いたしました。6月に入って事務室の壁を灰色から青色に塗り変えたのです。職員の手による手作りの色と作業。上手に塗れなくて心配をしましたが完成した時の喜びはそれだけにひとしおのものがありました。来館される皆様の評判もまずまずでホッと一息というところです。しかし、事務室の壁塗りはできたけれど11年目の歩みを始めた新生郷土館の色塗りはこれからです。(稲木)

利用案内

- 休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
- 開館時間 午前9時～午後4時30分
- 入場無料 (伯し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.13

昭和57年8月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL.0559-71-8228
発行 三島市教育委員会